

阡陵

ISSN-0913-1906

No. 25

関西大学考古学等資料室集報

平成4年11月30日発行



緑釉猪鬚（漢代）

目次

高麗恭愍王陵の壁画	2
資料紹介 岩手県上閉伊郡宮守村採集の玦状耳飾	5
丹波篠山町の歴史美術館	6
北京・圓明園遺跡	8
英仏博物館見聞録	10
博物館実物における「展示実習」について その2	12
資料としての『博物館・美術館だより』あれこれ	14

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3丁目3の35

Tel 06-388-1121（内線3341）

高麗恭愍王陵の壁画

網 干 善 教

(1)

1972年3月、奈良県明日香村平田に所在の高松塚を発掘調査したところ、石槨内に極彩色の壁画が描かれていたことが判明、多大の関心が持たれた。その壁画は星辰・日月・四神と群像形式で描かれた男女の人物像であったが、一般的興味は星辰、日月、四神よりも人物群像に寄せられた。

ところで、壁画検出以来、疑問として残っている問題、すなわち築造年代や被葬者の探究などは今日もおお盛んに論じられているが、全くの手付かずの問題もある。例えば東壁南側に描かれた男子群像、北側の女子群像、西壁南側の男子群像、北側の女子群像、共に4人が並ぶ群像であった。この場合4人であるということが、どのような意味をもつものなのか。何故4人という人数が描かれたのか。延いては、逆に何故1人、2人、3人、あるいは5人、6人それ以上でなくて4人でなければならないのか、という問題があった。

勿論、問題や設問のなかにはどうしても解けないものもあるだろう。また、それを解明し、解釈してもあまり意味をもたないという問題もある。しかし、疑問を抱き、課題を設定して追究してみることが必要と思う場合もある。他人から見ればどうでもよさそうなことであっても、当事者にとっては重要な問題である場合もある。この何故4人なのかということは当事者

である私にとっては一つの命題というべきものかも知れない。

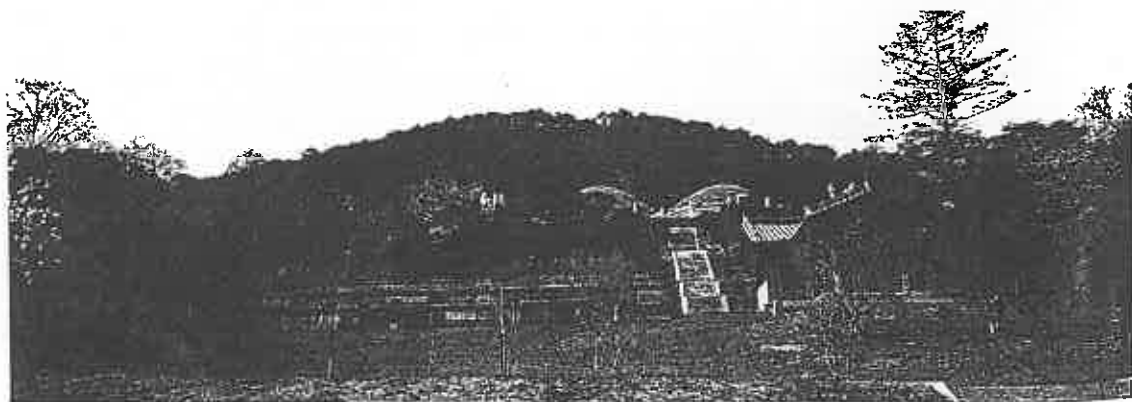
例えば高松塚での壁画検出以来、いつも比較されるのは中国の唐の乾陵陪塚である永泰公主陵や、懿德太子、章懷太子陵の壁画である。また、日本においては天寿国繡帳の刺繍文様である。だが、永泰公主陵をはじめとするそれらの陵墓の人物壁画は多人数が描かれていて、高松塚にみるような画一的な4人の群像とは異なる。しかし、このような4人という例は他にあるのだろうかという疑問であった。

(2)

1991年4月、高句麗会代表団の副団長として朝鮮民主主義人民共和国（以下「北朝鮮」と表記）を訪れた。5年前の1986年4月について2回目の訪朝であった。

今回は4月19日開城に赴き、高麗第31代恭愍王（在位1351～74）陵に行く機会があった。そして翌20日には開城歴史博物館を見学したが、その際、展示館の1室で、壁画のある石室らしいものの組立作業が行われており、中を見ると人物像が極彩色で描かれていた。その壁画は恭愍王陵のものであることがわかった。

石槨は切石でもって組合され、壁面はきれいに加工されていた。その左右両壁と奥壁の3方の壁に正装の各々4人の人物が笏を持って並んでいる壁画であった。また、槨の中央には棺を



高麗恭愍王陵・王后陵遠望

置く施設もあった。恐らくこれら人物像は棺の周囲をとりまくように配置された壁画であろうことは容易に推察できる。そうすると高松塚の人物像と同じ意味をもつものであろうか。

勿論、高松塚の壁画と比較すると異なることは承知できる。高松塚では東西両壁に男女各4人の群像が描かれていたのにここでは3方の壁に各4人のみであること、恭愍王陵では衣冠の笏をもった人物が正面を向いて描かれており、高松塚の壁画とは異なる。また、高松塚は7世紀末から8世紀初頭のものと考えられるのに対して、恭愍王陵は1372年の築造（寿陵）であること。

高麗と日本の相違などがあることはわかる。しかし、この4人というものが何の意味ももたず、単なる対称的なものなのか、あるいは4人を描いたということに特別な意味があるのか。それは今すぐには分らない。けれどもこうした事例のあることだけは知っておきたいと思った。

このことについて、北朝鮮共和国が発行する『朝鮮概況』の222頁に恭愍王陵について次のような文章が掲載されている。

玄室の東西北の壁と天井には多様な色彩で壁画が描かれている。3面の壁に12支神像が4像ずつ配されており、天井には北に北斗七星、南に1双の三つ星が、そして北斗七星の東南寄りに太陽が描かれている。

この記述からみると恭愍王陵も高松塚と同様に天井に天象図が描かれており、それが星宿と太陽であるという事実も明らかになった。高麗王陵の星辰について先きに開城歴史博物館で見した資料によって高麗国第20代神宗陽陵の墓

室天井に描かれたとされる星辰図を考察したことがある。『高麗王陵の星辰図について』『関西大学考古学等資料室紀要第9号』1992)

恭愍王陵の場合も内容は若干異なるらしいが同様な星辰図が描かれているものと推定する。

(3)

恭愍王陵は高麗国の古都開城の西方、直線距離で約7.25km、開城市開豊郡解線里(旧地名=開城郡中西面麗陵里正洞陵)にある。

立地は北の鳳鳴山より南に降る丘陵斜面に築造され、向って左(西側)に恭愍王玄陵、右(東側)に王後の魯国公主正陵がある。

この玄陵について『高麗史世家』によると恭愍王二十一年六月命起寿陵于正陵之測百官以秩出役夫輸石。

とあり、また

恭愍王二十三年九月甲申王暴薨。十月葬于正陵之西陵曰玄陵。

とあり、ついで

十月庚申葬玄陵。

と記す。なお旧朝鮮総督府編『朝鮮古蹟調査報告一大正5年度報告』にはこの陵について概ね次のように記している。

陵のある最上壇の第一壇は幅42.7m、奥行24.6mあって、左右と後方は切石をもって構築した幅約2.7m、高さ1.2mの石垣がある。

玄陵と正陵の間は僅か60cmほどの空間しかない。

両陵は12角の外形をしているが、殆んど



高麗恭愍王陵より南方を遠望



高麗恭愍王玄陵（向って左）と王后宣国公主正陵

同型同大で径約12.7m あるが、玄陵は高さ約6.1m、正陵は高さ約4.5mである。そして墳丘の裾は花崗岩の石材を用いた屏石がめぐっている。

面石には雲間に衣冠を着し笏を持った神

像を刻しており、十二方位將神（十二支）の各一であって、獸首あるいは獸冠を付している。

陵の周囲には4石虎、2石羊があり、石虎は両陵の四隅を守護し、石羊は両陵の前後にある。

第2壇は第1壇より約1.2m低い。中央に李太王4年に各陵に建立した表石があり、正面に各1個の長明燈がある。この段の左右に石人があり、二対の文官像が左右に対立している。

第3壇は第2壇よりさらに約1.2m低い。この壇には二対の武人像が左右に並ぶ。その下方は傾面斜となる。

丁字閣はその外側の平地にあるが遺跡は明了ではなく、普濟禪寺（雲岩寺）跡はこの南方にあって、二、三の礎石が遺存する。

玄陵及正陵は王氏高麗朝の最も完備し、かつその時代に全力を盡した営造物であって、比較的完全に遺存する。

この陵は古来から貴重な副葬品を蔵しているとの説により、前後3回にわたって発掘されたと伝える。

修理の際に墓室内を見た者の説明によると壁画は彩色絢爛として、非常に新しいような状態で遺存している。

このような主旨の説明文から知られる如く、恭愍王陵には極彩色の壁画があることは周知のことであったが、これが今回開城歴史博物館に復原展示されたことによりその様相を知ることができると同時に共和国の『朝鮮概況』によって天井に星辰と太陽図の描かれていることが明らかとなったのである。



高麗恭愍王陵内壁画（復元）

資料紹介 岩手県上閉伊郡宮守村採集の玦状耳飾

大 下 明

本資料室所蔵の玦状耳飾には、代表的資料として大阪府藤井寺市国府遺跡出土品6点があり、その一部はすでに詳細な検討が為されているが〔石野1973〕、他にもう1点所蔵されている。今回はこの資料を紹介したい（写真・図1）。

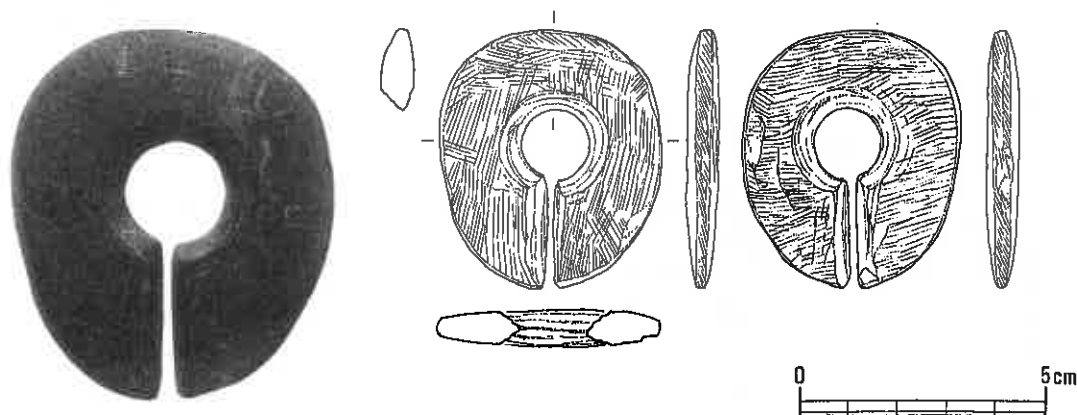
本資料は、『本山考古室要録』整理番号551番の付されたもので、「岩手県上閉伊郡宮守村」の採集とされる。同村採集品では他に打製石鏃・石匙など約30点が本資料室に収蔵される。詳細な採集地点については、記録からは検討し得ない。岩手県遺跡基本図〔岩手県編1991〕では、同村内には宮守川と達善部川の段丘上などに19ヵ所の遺跡が記載されるが、全て散布地で各地点の実態は不明である。本資料はそのうち後述のように、前期の遺物が確認される地点から採集された蓋然性が高いと考えられる。

今回検討する玦状耳飾の石材は淡緑色を呈し、凝灰岩（グリーントフ）であることが本学工業技術研究所による石材調査で鑑定されている〔鈴鹿1984〕。形態的特徴をみると、平面形は長さ5.0cm、幅4.5cmの楕円形を呈する。孔部径は1.3cmを測り、断面形は扁平な紡錘形で、厚さ0.6cmを測る。両面には整形時の研磨による線状痕が明瞭に観察される。玦状耳飾は、諸先学により形式変化が検討され、その出現は早期中葉に遡るとされる〔樋口1938・藤田1989〕。本

資料は、樋口分類のB類（楕円形）に相当し、藤田氏が提唱する型式率（切目長÷側縁幅）〔藤田1989〕では1.38を示すことから、所属時期は前期後半に比定しておきたい。また、東北地方出土の玦状耳飾は、石材に主として蛇紋岩・滑石を用いるのに対して、本資料は凝灰岩という類例の少ない石材を用いていることを、特徴の一つとして挙げることができよう。

＜引用・参考文献＞

- 石野博信1973 「1・2 玦状耳飾」『考古学資料図鑑』関西大学
 岩手県編1991 『岩手県遺跡基本図』
 鈴鹿恒茂1984 「考古学等資料室所蔵石器資料の石質調査の報告」『古文化財保存科学研究会調査報告』第1冊 関西大学工業技術研究所・関西大学考古学等資料室
 樋口清之1938 「玦状耳飾考」『考古学雑誌』第23巻第1・2号 日本考古学会
 藤田富士夫1983 「玦状耳飾」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣
 藤田富士夫1989 『考古学ライブラリー52 玉』ニュー・サイエンス社
 註 宮守村内の遺跡については、同村教育委員会阿部隆雄氏から資料提供・御教示を賜った。記して深謝の意を表したい。



玦状耳飾（宮守村出土）

図1 玦状耳飾実測図

縮尺2/3

丹波篠山町の歴史美術館

亥 野 疆

城下町篠山

J Rの大阪駅から福知山線の電車に乗って約40分、歌劇場と動物園で知られる宝塚駅に着く。そこから暫くは武庫川の、溪谷を左右にみおろしながら進むことになる。紅葉で有名な武田尾からのトンネルをぬけると車窓には一変して田園の広がる風景が目に入ってくる。

そこが石高3万6千石、九鬼久隆の居城であった三田盆地である。ここから凡そ1時間ばかり単線となった軌道の上を揺られながらいくと、こんどは「デカンショ節」で名高い篠山盆地の西端、篠山口駅に到着する。

盆地のほぼ中央部には江戸時代初め、徳川家康が大阪城に対する軍事的拠点と、西国諸大名への目付の役割をもって築いた篠山城があった。当初の城主は松平康重で、5万石で封ぜられていた。その後、文政10年、青山忠裕が城主におさまって1万石が加増され、6万石の大名となったのである。その以後は代々青山氏が城主となり、明治4年の廃藩置県まで受継がれてきたのである。

今日の城跡には巨大な石塁と内・外の堀が残っており、西側の外堀りに沿って建てられたお徒士町武家屋敷群と長屋門とが往時の片鱗をうかがわせている。城跡の北と東側は商店の立並

ぶ繁華街となっており、観光客への土産物を賣る店も多くなっている。

篠山盆地の古代遺跡

盆地内には明治27年、一部分が発掘された兵庫県下第二位の規模をもつ前方後円墳、車塚古墳（陵墓参考地）が遺存している。この他、多紀郡内には町指定をうけた古墳も数基存在している。多紀郡では埋蔵文化財に限らず広く一般の文化財に対しての分布調査が昭和44年、県の文化財の事業として行われた。この時点では単なる踏査におわったが、昭和47年以後、当地での農耕地圃場整備工事が実施されることになった際、それに伴う発掘調査も各地域ごとに行なわれたのである。その結果、今まで未知であった縄文時代後期の遺跡や、弥生時代全時期の遺跡も次々と実証されだしてきた。そしてその都度、出土する土器・石器等の遺物も年々増加の一途をたどることになった。又、郡内には全国的にみても只一つしかない祭神、櫛岩窓命、豊岩窓命二柱を奉祭する延喜式内社の櫛岩窓神社がある。このようにみていくと、当地は古代より大和の豪族達と何か深い係りをもってきた土地柄であったとみられる。

歴史美術館

最近になって北摂地方の各市町では官公立、私立をとわず、館種やその規模の大小に関係なく、博物館なり、美術館、あるいは資料館などが建設されるようになった。こうした背景には一般市民の文化財に対する関心が高まってきたことと、地方の行政機関でも文化財に対しての財政面が安定してきたことにも関係している。更には上記の施設を利用する人々も専門的な研究者だけにとどまらず、市民層の知識水準の高まり、余暇時間のもてる人達の多くなってきたことも事実である。

こうした社会の趨勢のなかで篠山町では明治24年、篠山地方裁判所として建築され、昭和56年6月までその目的を果してきたわが国最古の木造裁判所を重要建築物として永く保存していくことになった。そこで、外観と旧法廷場をそ



新旧家屋の並ぶ二階町商店街

のまま残し、その他の部屋を改造、篠山町を中心に出土した遺物、江戸時代の美術工芸品を展示することにした。そして翌、昭和57年4月1日から歴史美術館の名称をもって一般に公開することにしたものである。

博物館の建物は瓦葺きの長い入母屋造りで本棟の両端には西向きに張り出した部屋をつくっている。その中央には広い式台（今は石敷で階段）をもった入母屋造り屋根の玄関がある。

本館に至るまでには東向きに建てられた切妻屋根の大門が威厳を示している。門の中央には両びらきの扉をつけ左右には潜口^{カクリガキ}を設けている。さすが城下町にふさわしい武家風屋敷の門である。（敷地面積2100m²、展示床面積564.2m²）。

館内はすべて撮影禁止となっているために、陳列形式等を紹介することの出来ないのは残念である。

展示室は全部で6部屋に仕切られており、玄関右側奥の第一展示室から観ることになる。

この部屋で際立って目につくものは、三方の壁側に立てられた立派な屏風である。図柄は坤与萬国図、吉野山全景図、東海道・中仙道・甲州街道、道中図、いづれもあでやかな色彩画である。

中央の小ケースには江戸時代、武家で日常使用していた調度品の数点が並べられている。

第二展示室には文政年間(1820年代)、時の城主であった青山忠裕が京都より青磁焼の工匠、古堂龜裕を招いて城の東北にあたる王子山で窯を始めた。その窯で焼成された青磁、染付、赤絵、三彩など精巧な品々が大小のケース中に一杯置かれている。これらの作品は陶磁器研究家にとって、今一つ丹波古陶館に展示されている庶民の焼物丹波焼との比較研究にも興味をわく資料となるであろう。

第三展示室、ここには藩主青山侯ゆかりの具足・刀掛・刀筒・太刀・銭形文の旗印・馬につける鞍・鎧・等が置かれている。

慶長の昔、築城にあたっては西国15ヶ国、20の諸大名に助役を命じ1日延べ8万人を動員してわずか半年で城を完成されたと云う。

その権勢を誇った家柄だけあって、その持物には目をみはらせる上級品が多い。

第四展示室はあまり大きくないが、ここには

当地区出土の古代遺物が置かれている。

沈線の入った縄文土器・弥生時代の小型壺と台付壺、古墳時代のものは少し点数も多くなっている。即ち画文帯神獣鏡・七鈴鏡・環鈴に馬鈴、鏡板・大型提瓶などである。少し時代はさがるが経筒も置かれている。

廊下を隔てた向いには旧法廷と特別展示室がある。法廷場は以前の様子をそのままに残しており、現在では講義室とか談話室として使用されている。

特別展示室はある期間ごとに品物をかえて陳列されることになっている。館内では以上である。館の内部全体は旧来の建物利用ということもあって、ごく最近にオープンした博物館や資料館のような感覚はない。採光の点も特に工夫のこらしたと云うようなものではない。

しかし、町全体の風物とマッチした雰囲気を楽しむことの出来るのは、住時を復元させようとするものにとって限りない楽しみを感じさせられるものである。

大阪・神戸あたりから一日の見学行程として考えるなら格好の処である。

参考資料

『兵庫県の歴史散歩』下 兵庫県歴史学会 山川出版社 S, 51年

「古代祖先のあゆみ」篠山町教育委員会

S, 55年

『日本の古代遺跡2・兵庫県北部』森活一・檀木誠一他 保育社 S, 57年



歴史美術館正面入はあたり

北京・圓明園遺跡

松 浦 章

I

中国近代史上における著名な庭園と言え、1860年のイギリス・フランス連合軍によって破壊された北京の北西郊外にある圓明園であろう。一般に圓明園と呼称されているが、圓明園は圓明園と長春園と萬春園（現在、綺春園と呼ばれる）の三園からなり、全ての面積が35万 ha に及ぶ広大な庭園である。今夏に参観した圓明園の遺跡（写真①）に関して若干報告してみたい。

II

圓明園の建設が始まるのは通説では康熙四八年（1709）とされている。この年に康熙帝が第四皇子、のちの雍正帝に庭園を与えた。

雍正帝は「圓明園記」（『世宗憲皇帝御製文集』第五、記）の冒頭に、「圓明園は暢春園の北にあり、朕が藩邸居する所の賜園なり」と記している。また乾隆帝も「圓明園後記」（『御製文初集』卷四、記）の初めに「昔わが皇考（雍正帝）、皇祖（康熙帝）の賜園により脩めてこれを葺く」と記している。

清代中期の北京の状況を記した呉長元の『宸垣識略』卷十一、苑囿の条に「圓明園は掛甲屯の北にあり、暢春園を距つること一里ばかり」とある。圓明園は皇城の北西部にある掛甲屯の北にあって、康熙帝の庭園として知られる暢春園より一里、約0.58キロ程北に位置していた。圓明園を訪問した朝鮮使節らは「圓明園記」を幾編か残しているが、道光十二年（1832）の使節金景善の『燕轅直指』卷五、に見える「圓明

園記」によると「圓明園に至るに、園は徳勝門を距つること四十里たり、公道の物色我が国の東西郊とほぼ同じ、西山のふもとにあり、故に或は西山と称す、これ雍正皇帝の離宮なり」と圓明園は皇城北西門の徳勝門より四〇里と記している。

圓明園には南の大宮門を初めとして十八門があり、庭園内には「圓明園四十景」と呼ばれ、各殿を配していた。最初のものが「正大光明」であった。しかし破壊されたため乾隆時代の宮廷画家沈源らが描いた「圓明園四十景」（原画はフランス・パリ国立図書館所蔵、沈偉寧、邱治平両氏「談〈圓明園四十景〉」『雲・中国絵画研究季刊』1992年第2期、5月）の写しより往時を偲びたい。写真②は「方壺勝境」である。

III

圓明園の状況を詳細にヨーロッパに伝えたと言われるのがイエズス会士アッティレの1743年（乾隆八）のアッソーにあてた書簡である。

別荘（圓明園）の方は大変魅力に富んでいます。これは広大な土地のなかにつくられていて、そこには人工によって高さ二十ピエ（一ピエは約0.325メートル）から五、六十ピエまでの小山が築かれており、その間に無数の小さな谷が形成されています。！

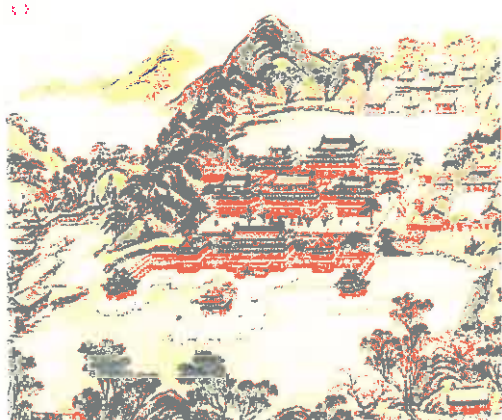
（矢沢利彦氏編訳『中国の医学と技術 イエズス会士書簡集』（平凡社、東洋文庫301、1977年1月）328頁。）

皇帝が普通駐在しておられる、そして陛下のすべての夫人がた、すなわち皇后、貴妃、妃、嬪、貴人、常妻たち、侍女たち、宦官たちが泊まっている場所は建物、中庭、庭園等々の驚くべき集合体です。（中略）

皇帝のこの常駐所は入園門、最初のいくつかの宮殿、謁見殿、中庭およびこれらに付属する庭園のすぐあとにあります。それはひとつの島をなしています。四面が広い深い運河でとり巻かれています。後宮と呼ばれるで差しつかえないでしょう。家具、装備、絵画、＜シナ人好みの＞銘木、日本および



写真① 圓明園遺跡



写真② 圓明園・方壺勝境

シナの漆器、古陶器、絹織物、金銀織物に関して、想像しうるすべての最良のものが見られるのはこの後宮を構成する部屋部屋です。(同書、333～334頁。)

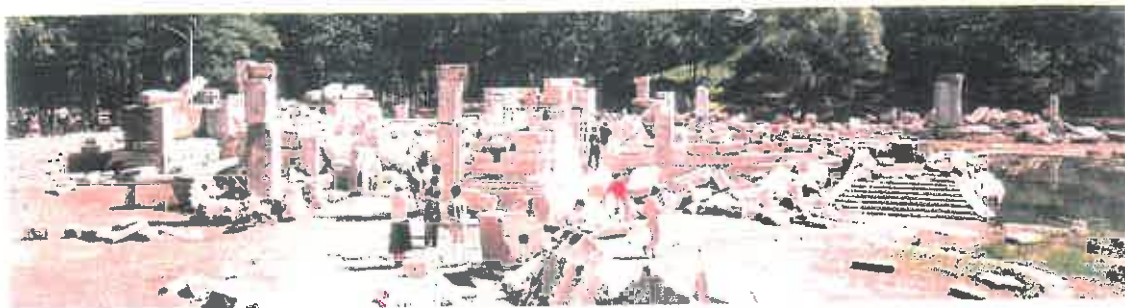
ここに引用した書簡の若干部分からも圓明園内の贅をつくした状況が知られるであろう。

世に有名なのはこの書簡が書かれた後に造られた西洋楼である。フランスのロココ様式を採

用して、圓明園の北東部に接し、長春園の北端に接するように東西に長く築かれたのがいわゆる西洋楼である。建設は乾隆十二（1747）より乾隆二五（1760）まで十三年間を要したとされている。最も早い乾隆十二年に完成したといわれるのが「諧奇趣」（写真③）である。吳振棫の『養古齋叢録』巻十八に「結構は西洋式によりて、並びに西洋の水法を用いるものあり、額に諧奇趣と曰う」と「諧奇趣」がフランスの建築様式で建られ、その上、噴水等の水を観賞の対象とする技法が採用されていたことを如実に伝えている。同様に水法様式の建築物として有名なのが「大水法」である（写真④）。

IV

圓明園は破壊されて以降、幾度か調査されてきたが、1980年8月に罹劫120年を記念して北京で学術討論会が開催され、また圓明園学会が発足した。その成果の一部が『圓明園』第一集（1981年11月）、第二集（1983年9月）、第三集（1984年12月）、第四集（1986年10月）と出版され、また中国第一歴史檔案館編の『圓明園』上、下巻二冊（上海古籍出版社、1991年5月）が刊行されさらに綿密な調査研究が進むものと思われる。



写真③ 長春園 西洋楼・諧奇趣



写真④ 長春園 西洋楼・大水法

英仏博物館見聞録

武 智 昭 洋

私は4回生のときに、「博物館実習」を受講した。実習に関する講義や、実際に考古学資料室の展示品を用いて資料の整理・取り扱い・梱包を行ったり、展示実習を催したりした。

夏休みに入り前期には京阪神の、後期には国立博物館・科学博物館・千葉県佐倉市の歴史民俗博物館をはじめとする関東地方の博物館を精力的に見学実習をした。

実習に参加し博物館を見学する一方で独自に博物館関係の文献を収集し、読んでいくうちに博物館の抱える課題が見えてきた。

第1に博物館の現状は最近でこそ注目されてきているが、まだまだ物を見せる機能でしかないという点である。

第2に日本の博物館は欧米のそれと比べて学校教育の一環として余り用いられていないし、欧米程市民の憩いとなっていないという点である。

第3点として博物館の国際組織であるICOM(国際博物館機構)に日本は加盟しているが積極的な貢献はあまりなされていないという点である。

博物館が魅力にあふれ、市民や地域の住民の憩いの場所になるには博物館はいかなる運営をなすべきか?地域の憩いになるのは勿論、地域外の見学者にも喜んで利用してもらうには学芸員はどのように取り組むべきか。

国際化社会と言われる現代においても博物館もまた例外なく海外の博物館と展示品の貸借のみならず、学術会議や博物館の会合を積極的に開催していくことにより、博物館の抱える諸問題の解消、そしてよりよい博物館の運営に向けて前進していくのではないだろうか。海外博物館施設を見学しておくことも必要であると考え、卒業間際ヨーロッパの博物館施設の見学を行うこととした。

考古学等資料室より文学部のジョンソン先生を紹介してくださり、ジョンソン先生によって大英博物館のローレンスミス先生を紹介して

くださった。

ジョンソン先生の御好意で、埼玉大学のポールグリフィス先生をも紹介してくださり、グリフィス先生の御好意でビクトリア&アルバート美術館のルパートフォークナー先生を紹介してくださいました。

平成3年3月10日~17日まで、イギリス(ロンドン)とフランス(パリ)を訪れた。英国では大英博物館、ヴィクトリア&アルバート美術館、英国自然史博物館を、フランスではルーヴル美術館、オーランジェ美術館、オルセー美術館、ポンピドウ現代アートギャラリーをそれぞれ見学した。どの美術館・博物館もおしなべて巨大であった。テレビや新聞等で見慣れているはずなのに実物を肉眼で見ると迫力がまったく違った。

中に入っても広くてあたかも自分が迷路にいるような錯覚を抱いた。日本の博物館のように順路や案内図があまりなくてわかりにくかった。

英国自然史博物館で昼食をとろうとレストランを捜したがなかなか見つからなかった。入口と展示館の廊下にはレストランの表示はあったが、レストランの方向を向いて歩いてもなかなか見あたらなかった。日本の博物館なら懇切丁寧に案内版を出しているのだから判りやすいと思った。宮殿や駅のあとに博物館として使用されているために、天井が高かったり低かったりと見

BRITISH
MUSEUM



学していておちつかなかった。

次に展示方法が乱暴に思え、作品の破損の心配されるケースにしばしば出くわした。ポンピドウ美術館を除いて私の見学した博物館のすべては宮殿跡や駅の跡を博物館として使われている。そのため床も廊下もレンガが埋め込まれていたり、コンクリートになっていて資料の運搬、撤去に支障をきたすのではなかろうか。展示のほとんどが露出展示で、展示ホールに日光が差しこんできてそのために絵画が変色したり絵の具が欠けていたのを多数見かけた。

ガラスケースにしても、新設コーナーを除いてほとんどの硝子ケースは照明の調節のできな古いケースだったし、特別に温度湿度に注意を払っているとは思えないものが多かった。

次に博物館の運営について述べてみたい。ヴィクトリア&アルヴァート美術館のルパートフォークナー先生とお話したが、ヴィクトリア&アルヴァートは特別展は年に1回、多くてせいぜい2回ぐらいしか実施しない。常設展示こそ博物館の柱で、常設展を崩してまで特別展には神経を注がないことを先生からお聞きした。

同様の見解を国立民俗学博物館の梅棹忠夫先生が『博物館と美術館』のなかで述べておられる。私も常設展示の充実がもっとも大事だと思う。

自然史博物館を見学していると、ある小学校のクラスが引卒の先生に連れられて見学してきた。生徒達は先生より数点注意を受けると思い思いのコーナーにメモやスケッチをもって散って行った。引卒の先生に聞くと月に1回から2回は博物館を授業の一環に利用しているということだ。同様な光景は大英博物館でもヴィクトリア&アルヴァート美術館でも見られた。

フォークナー先生によれば学校は博物館と連絡を取り合い、学校は博物館を利用し、博物館側も学校に場所と資料を提供している。交流が密なのである。

大英博物館においては小学生が授業に利用するほかに学者や研究者、作家が研究の教材によく利用していることをスミス先生に教えてもらった。大英博物館を研究の場に利用した有名人は私の知るかぎり、民俗学者の南方熊楠や作家のコリンウィルソンである。

何よりも私が驚いたのは、博物館は資料の収

集・保管・展示をふまえた資料を見せるだけの場所から、企業など社会との関係の中に位置付けられてきているのを大英博物館で感じた。

大英博物館の5階に「日本ギャラリー」が92年4月開設に向けて準備されていたが、準備中の作業場をスミス先生の案内で特別に見学させてもらった。日本のお茶の裏千家が紹介され、裏千家の茶屋が再現されていて、茶道の実演も予定されている。他には茶器や掛け軸が展示されることになっている。日本ギャラリーの床はカーペットで敷きつめられ、木造和風建築で、他のコーナーとは異なっている。日本ギャラリー開設の目的は茶道を紹介することで日本人の心を理解したいようである。スミス先生によれば日本ギャラリーには日本の企業「コニカ」が企業の宣伝のためにスポンサーになっている。日本ギャラリーの開設の背景には日本への関心の高まりであると説明してくださった。

以上ヨーロッパの博物館を見学した中で印象に残ったことを述べてきたが、イギリスもフランスも博物館・美術館が市民の憩いの場として位置づけられるように思えた。建築物の巨大さ、内部空間の壮大さ以上に社会教育の充実、市民や国民の意識の違いがあるのではないだろうか。

大英博物館の日本ギャラリーに見られるように博物館の社会もまた、他の社会同様社会の中の博物館という意識を学芸員のみならず社会教育の関係者達は、今後育んで行く必要がある。海外の博物館とつながりがなければ諸情報において取り残されていくことはむろんのこと、新しい時代に対応できなくなるのみならず博物館の抱える現状の諸問題の解決もおぼつくまい。

フランス国の博物館施設については別の機会にゆずりたい。

<参考文献>

- 1『肝陵』（網干善教編、関西大学博物館学課程創設20周年記念特集）
- 2『司書、学芸員になるには』（金子量重編、ペリカン社、1977）
- 3『博物館と美術館』（梅棹忠夫、中公新書、1981）
- 4『博物館と情報』（梅棹忠夫、中公新書、1981）
- 5『博物館学概説』（網干善教編、全国大学博物館学講座協議会関西部会、1985）

博物館実習における「展示実習」について その2

角 田 芳 昭

本学博物館学課程が開講されて平成3年度で30周年となった。そこでこの課程を受講し博物館施設及び研究機関等へ勤務されている卒業生及び教職員に研究論文や資料紹介の原稿を依頼したところ35編が寄せられ、それに資料編とでA5判で721ページにも達する30周年記念論文集が刊行された。考古学、歴史学、民俗学、美術史など多方面にわたっており、各界で活躍されている先輩や後輩に対して尊敬の念と感謝で一杯である。しかし若干でも実習をお手伝した筆者として喜びにたえない。特に毎年展示実習には準備段階を含めて夜遅くまで学生につきあい助言指導したことがなつかしい。

第24号において昭和53年度まで書いたので、54年度より記してみたい。この頃より実習受講希望者が急増し、とうてい30名ではおさまりにない状態となり、従来の1クラスを更に1クラス増加し定員も60名受講することが決定された。ガイダンス、面接等が行なわれ、52名の受講生が決定した。美学・美術史コース実習担当者として奈良県立美術館へ勤務されていた宮崎隆旨氏、高橋隆博氏のお二人が非常勤講師として指導されることになった。Aクラスを歴史、考古、民俗等に興味ある学生、Bクラスを美学・美術史等に関心のある学生とし、それぞれの個性を生かした実習授業を行なうことになった。最初のガイダンスを4月13日に実施し『実習簿』『実習日程』『受講許可名簿』を渡し、各担当者の紹介と実習内容について説明がある。展示実習については小野勝年先生が説明され、展示実習を実施し始めてより3年目、最後の総括として行なうものであり、その計画を夏秀実習において話し合い、その計画書を9月下旬までに提出すること。各クラスに1ケースの割合で展示し、その結果の展示目録を作成すること。各クラスの代表者が5分間程度の展示資料解説を行なうこと。などであった。

展示実習テーマは次のとおりであった

Aクラス

考古1班 「古代吉備王国—その栄光とたそがれ—」

考古2班 「日本列島の第四期と人類」

民俗1班 「ハレとケの民俗」

民俗2班 「日本の正月」

民俗3班 「花咲く東山文化—幽玄の世界—」

Bクラス（美学・美術史コース）については梱包実習、見学実習などが残っており、また準備不足のため実行できなかった。最終日に諸先生方の講評と反省会がもたれ次のような講評がなされている。①全体的に展示方法に細心の注意が払われていない。②中心となる展示資料がない。③順路、順序が不明確。④年表、図表、パネル等ていねいに展示すること、また賜くに仕上げて展示を行なうこと。⑤題箋の名称、年代、出土地、所蔵者等の順序を統一すること。⑥文学はていねいに解りやすく、書体は統一し、無ずかしい漢字にはルビを振ること。⑦時代別あるいは制作順に正しく資料を展示すること。⑧展示ケースと展示資料とのバランスを考え、解説板もそれに合わせ、また背面、壁面も利用すること。⑨目録の冊子は10ページぐらいとし、展示資料、目次、展示趣旨、本文解説、あとがき、実習生氏名、日付など最底の必要事項を網羅すること。⑩資料の選別とコピー資料の製作の活用などであった。これらの項目は以降の実習展示において毎回指摘されているところである。

展示における長所としては①吉備という国へスポットを当て展示した着想はよろしい。②レプリカや掛軸の複製品を実際に展示したところは効果が出ていてよろしい。③全員が展示のため一致協力して作業していたことは学芸員としての基礎であり、何事にも今後協力を惜まぬようにすること。④資料解説においては比較的広く研究しており合格点をあたえられる。反省会において学生より発言は、①展示実習についての具体的な指導が充分されなかった。②発表会には担当者全員の先生方の出席があつてしかるべきだ。③準備期間を長くとり、早い時期から実習展示を指導していただけたらより充実した展示となった。④学内外への案内やPRがなかったため、一般の学生、教職員の見学がなく自

己満足に終わったのは残念などあった。担当者の打合せにおいてもこれらの点を多に反省材料にして指導していく必要があるとの結論であった。Bクラスとして設けられた美学・美術史へ興味をもつ学生は新しい担当者と文学部哲学科へ所属する学生なども多く活発な実習であったが、展示実習については準備不足のため、計画倒れとなり、実施できなかったのは残念で、学生間でも不満の声が聞かれた。3年目を迎えた実習展示発表会も担当者と学生、この連絡調整の事務職員もほぼ要領が身につき、カリキュラ

ム作成においても展示実習を重視し繰り込まれていった。この年度の卒業生には名古屋市博物館、大阪府堺市博物館、鳥取県埋蔵文化財センター、兵庫県立近代美術館、兵庫県立歴史博物館などへ学芸員として勤務し現在活躍中である。あるいは本学非常勤講師や暁女子短期大学で指導講義を行なっている者も出ている。この数年間は年10名程度博物館施設や文化財発掘担当者として業務に従事されている。以降の実習については次号へゆずりたい。



目録作成の打合せ



展示完成ケース



実習展示作業



展示資料解説



展示作業中における小野勝年先生の指導



網干善教先生による講評

実習展風景

資料としての『博物館・美術館だより』あれこれ

毎月多数の『博物館だより』の寄贈を受ける。博物館、美術館、資料館等の展示会の催しや、資料紹介、学芸員の研究成果などを発表されており、これらは非常に参考となり役立つもので館ごとにまとめ、合本し保存しておく資料として多に活用できる。そこで今回はこれらの資料についておもしろくまを述べてみたい。

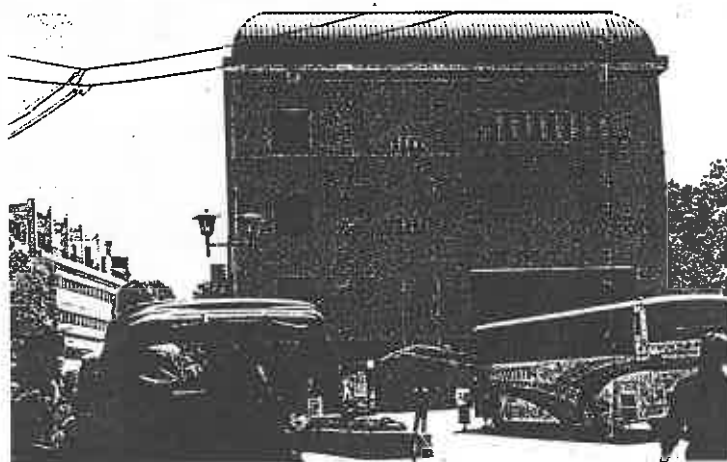
誌名としては『博物館だより』『美術館だより』『資料館だより』など〇〇館だよりが圧倒的に多い。続いて『博物館ニュース』『美術館ニュース』…等の〇〇館ニュースと名付けられたものが多い。この2タイトルが多いが、他にユニークな名称のものとして大阪市立美術館の「美をつくし」兵庫県立近代美術館の「ピロティ」宮崎県総合博物館の「森の通信」東海大学海洋科学博物館「海のはくぶつかん」国立民族学博物館「みんぱく」東京国立近代美術館の「現代の眼」東京国立博物館の「MUSEUM」芦屋市立美術博物館の「なりひら」、兵庫県立歴史博物館の「わたりやぐら」など諸種が発行され各々の博物館で活用されている。この博物館だよりの中で冊子形式のもので最もバラエティに富み質量ともにその内容が充実していると考えられるのは『季刊子規博だより』ではないだろうか。勿論これは紀要的性質をも兼ねているものであるが、編集者のご苦労がうかがわれる立派なものである。松山市立子規記念博物館として開館したのは昭和56年4月2日で、地下1階、地上4

階建、延体面積7600m²の建物である。道後温泉駅のすぐ近くにあり、設計以来11年を経過し益々その充実した運営がはかられている。『子規博だより』も創刊以来平成4年6月で通刊44号発行されている。今度改めて読み返してみても諸々と示唆されることが多い。

創刊よりB5判24ページ建であり、現在もこのフォームを踏襲している〔但し開館10周年記念号（平成3年1月）のみ48ページ〕

表紙の写真については松山市内の著名な建物や風景を取り入れ、また子規ゆかりの地を収録している。

また子規に関連した人物を書かれているのは研究者にとって参考となる。すなわち会津八一、鉄幹、碧梧桐、小野竹喬、浅井忠、草田男、井泉水などの人々である。毎回ゲストを招いての座談会がありこれも良い企画である。表紙写真も9巻より撮影場所を入れられており参考となる。10巻3号（平成3年1月）は開館10周年記念号であり、10周年をふり返る企画と総目次がつけられ、資料として活用できる。子規に関する様々な講座、行事や、友の会の活動も盛んで、今後更に充実発展されていく博物館の一つであろうと考える。期待したい。その他に「美をつくし」「ピロティ」「海のはくぶつかん」などもそれぞれにユニークで素晴らしい。次に寄贈を受けている博物館だよりを掲げ、感謝の意を表し、今後ともご指導ご協力をお願いしたい。〔角田芳昭〕



松山市立子規記念博物館

寄贈を受けている博物館・美術館だより等

書名	号数	発行
青森県立郷土館だより	第25～46号	青森県立郷土館
熱田神宮宝物館だより	No.9～69	熱田神宮宝物館
石川県立埋蔵文化財センター所報「拓影」	第8～18号	石川県立埋蔵文化財センター
石川考古	第121～168, 205号	石川考古学会
石川れきはく	第5～25号	石川県立歴史博物館
泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要	創刊～3号	泉佐野市教育委員会
茨城県立歴史館だより	No.40～55	茨城県立歴史館
海のはくぶつかん	No.11～126	東海大学海洋博物館
大阪文化財センター通信	No.3～5	大阪文化財センター
大阪あーかいぶず	第6号	大阪府公文書館
沖縄県立博物館だより	No.30	沖縄県立博物館
鹿博だより	No.1～14	鹿児島県立博物館
宇野市の博物館だより「ハッポ通信」	No.2～7	宇野市ハッポ総合博物館
河内長野市文化財情報誌「仁深野（にんしの）」	No.1	河内長野市教育委員会
吉備路郷土館だより	No.6～15	岡山県立吉備路郷土館
岐阜県博物館だより	第2～47号	岐阜県博物館
京都国立博物館だより	第80～96号	京都国立博物館
草戸千軒（くさどせんげん）	No.216, 217	草戸千軒町遺跡調査研究所
倉吉博物館だより	No.15	倉吉博物館
群馬の森 美術館ニュース	No.42～70号	群馬県立近代美術館
県博協通信「MUSEUM NETWORK」	創刊～2号	神奈川県博物館協会
元興寺文化財研究（研究所通信）	No.3～16	駒元興寺文化財研究所
埼玉県立博物館だより	第10～79号	埼玉県立博物館
埋文さいたま	第10号	埼玉県埋蔵文化財センター
堺埋蔵文化財だより	創刊号	堺市立埋蔵文化財センター
さきたま	No.1～4	埼玉県立さきたま資料館
滋賀埋文ニュース	No.7～150	滋賀県埋蔵文化財センター
滋賀県文化財だより	No.13～39	滋賀県文化財保護協会
サントリーニュース	No.52～74	サントリー美術館
静岡の博物館	No.28	静岡県博物館協会
信濃考古	No.60～102	長野県考古学会
資料館だより	No.8～20・46～56	船橋市郷土資料館
市立美術館だより	No.27・29	鹿児島市立美術館
資料館だより	No.12	大阪狭山市立郷土資料館
泉北考古資料館だより	No.11～39	泉北考古資料館
高砂市文化財研究シリーズ	等2集No.1～5	高砂市教育センター
辰馬考古資料館「展覧の葉」	12～17	駒辰馬考古資料館
丹後郷土資料館だより	第17～21	京都府丹後郷土資料館だより
千葉県立房総風土記の丘だより	12～18, 23	千葉県立房総風土記の丘
帝京大学 山梨文化財研究所報	第15～16号	帝京大学山梨文化財研究所報
東北学院大学博物館学芸員課程報	第15号	東北学院大学文学部
富山県埋蔵文化財センター所報「埋文とやま」	第15～39	富山県埋蔵文化財センター
富山市日本海文化研究所報	第3号	富山市日本海文化研究所
富山市考古資料館報	No.18	富山市考古資料館

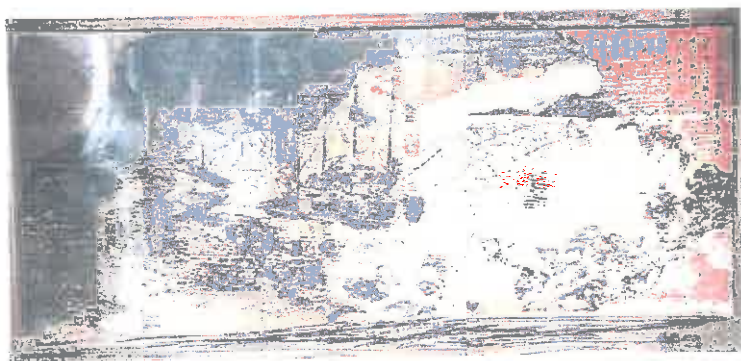
書名	号数	発行
富山市郷土博物館だより	平成2～4年度	富山市郷土博物館
長崎県立美術館博物館だより	No.49～109	長崎県立美術館
長岡京	創刊～31号	長岡京発掘調査研究所
名古屋市博物館だより	第72～88号	名古屋市博物館
奈良県立民俗博物館だより	第25～61号	奈良県立民俗博物館
奈良県立橿原考古学研究所彙報「青陵」	No.51～62	奈良県橿原市考古学研究所
奈良県立美術館だより	第25・26	奈良県立美術館
なりひら（芦屋市立美術館だより）	第4号	芦屋市立美術館
南山大学人類学博物館館報	第8～27号	南山大学人類学博物館
西宮市立郷土資料館ニュース	No.8～10	西宮市立郷土資料館
農業資料室展示案内	No.13	東京農業大学資料室
博物館ニュース	No.20～22・34～90	秋田県立博物館
博物館だより	No.31～41	神戸市立博物館
博物館だより	No.8～12	岩手県北上市立博物館
博物館だより	No.26～38	群馬県立歴史博物館
博物館のひろば	No.12～46	斜里町立知床博物館
博物館だより	No.1～5	安城市歴史博物館
博物館だより	No.1～3	八戸市博物館
博物館だより	No.14	一宮市博物館
八王子市郷土資料館だより	No.15～47	八王子市教育委員会
東大阪市文化財協会ニュース	1986.3～1989.1	大阪東大阪市文化財協会
彦根城博物館だより	No.1	彦根城博物館
美術博物館ニュース	第1～26号	東京大学教養学部美術博物館
美術館ニュース	第1～18号	岡山県立美術館
美術館教育研究	1991.3～1992.1	美術館教育研究会
広島県立歴史博物館ニュース	第6～12号	広島県立歴史博物館
ピロチ・兵庫県近代美術館ニュース	No.40～85	兵庫県立近代美術館
福井考古学会会報	第3～9号	福井考古学会
ふくいミュージアム	第7～22号	福井県立博物館
福岡市博物館だより「Facata」	No.3～7	福岡市博物館
別府大学付属博物館だより	No.10～36	別府大学付属博物館
埋蔵文化財発掘調査速報	平成2年度	橿原市千塚資料館
三重県埋文センター通信「みえ」	No.2・3・5・6	三重県埋蔵文化財センター
美をつくし	No.101～137	大阪市立美術館
民俗文化	第206～257号	滋賀民俗学会
民家集落ふるとだより	創刊～No.11	勸日本民家集落博物館
民俗芸能だより	10号	和歌山県民俗芸術保存協会
森の通信	第4～15号	宮崎県総合博物館
八雲立つ風土記の丘	創刊～115号	島根県立八雲立つ風土記の丘
横浜市三殿台考古館館報	No.2～17	横浜市三殿台考古館
歴風ニュース	第1, 2号	広島県立歴史民俗資料館
れきみんきょう（広島県歴史民俗資料館等連絡協議会報）13号		広島県歴史民俗資料館等連絡協議会
わたりやぐら	第16号	兵庫県立歴史博物館

寄贈資料

本学理事（校友会副会長）徳山喜昭氏より平成4年10月「大絵馬」の寄贈を受けた。畳一帖大で文永弘安の役（蒙古襲来の変）を題材にし嘉永7年（1854）奉納と銘記されている。我が国の絵馬としては非常に珍しいもので、史実を題材にしたものとして貴重なものである。教育研究資料として今後多いに活用されるものと思われる。



網干委員長より感謝状を受けられる徳山喜昭氏（右）



寄贈された大絵馬（嘉永7年奉納）

編集後記

第26号をお届けいたします。今回も先生方にはお忙しいところ原稿をお寄せいただき感謝申し上げます。

「考古学入門講座」も事業局の格別のご協力によりますます盛況さを増しており、今秋の第3回も約450数名の申込者があり、老若男女の受講者が千里山へお越しになり熱心に受講されておられます。

前号よりカラーページが増え8ページとなり、誌面がカラフルになりました。今後も充実していきたいと思いますので、管理運営委員の先生方や法人のご指導を仰ぐものであります。

表紙の資料は中国漢代の明器であり「緑釉猪圈」である。殷周代には青銅器をうつした土製品、鉛製品があり、戦国時代には黒陶俑

といわれる10cmから20cmくらいの土偶がつくられ、また動物、鏡、帯鉤、高杯耳杯、鐘などのミニチュアが作られた。漢代になると帝室に明器をつくる東園匠という役所が設けられた。家屋、瓦井、畜舎、屋舎、車輿、楽器、壺等の模型があり生前使用していた全てのものがつくられている。死後の世界の生活に奉仕する従者としての人物など多く、墓室内に納められた。この資料は後漢の紀元2世紀頃に製作されたものと思われ、高さ18cmである。周垣は円形で一隅に厠を付設し、四柱本瓦葺の屋蓋があり、中央部に母豚が寝そべり、子豚5匹が乳房をくわえ乳を飲んでいるほほえましい図像である。同様のものは多数の博物館で見受けられる。〔角田芳昭〕